
書評

**Scott Soames, *What is Meaning*
(Princeton U.P., 2010, ix+132p.)**

大川祐矢

本書はラッセル・フレーゲにまで遡れる、現代主流の命題観に対し、その問題点の指摘と代案の提示を主眼としている。

著者により最終的に提案される代案は、「認知的実在論 (Cognitive-Realist Theory)」からのアプローチである。昨今、命題という概念は、言語哲学や論理学のみならず、知覚の哲学や心理学、および認知科学など非常に幅広い分野で用いられており、特にその認知的な側面が重要視されるようになってきている。そのような潮流の中で、命題を徹底的に認知との関わりの下で捉え、かつその実在性を強調する著者の代案は、現行の論争状況を的確に反映したものであり、その点でそうした研究に携わる者にとり決して見過ごすことの出来ない見解と言えよう。

本書評は著者がそうした代案を提出するに至った過程を次のような形で追いかけていく。まず、旧来の典型的な命題観であった、フレーゲ・ラッセル的な命題観に対する著者の診断を確認する。次に、そこで見られた問題を回避するために、著者が最初の代替案として提示した、命題の「デフレ説 (Deflationary Account)」からのアプローチを見る。著者は、そのアプローチによってフレーゲ・ラッセル的な

命題観が孕んでいた問題点を回避することが出来ると主張するが、一方で、複合命題に関する解釈に於いて、そうしたアプローチは適切な分析が施せないという問題点があることが指摘されている。それがどういった問題点であったかを具体化し、それを回避するものとして最終的に提示された、認知的実在論からのアプローチをその次に見る。

従来のフレーゲ・ラッセル的な命題観における問題として著者が提示しているのは、命題が事実とつながりを持っているという性質、すなわち命題の表象性がどこから生じてくるかをそれは説明出来ないという点である。こうした問題が生じる理由は、フレーゲとラッセルは、命題の表象性を内在的なものであると想定してしまい、更にその問題が「いかにして構造的となりうるのか」という点にあると誤解してしまったからだ。それ故、新たな命題観として必要になるのは、命題の構造化を説明出来るのみでなく、真正の問題であるその表象性の要因も説明出来ることとなる。

上記の通り、著者はまず新たな命題観として、デフレ説的なアプローチについて検討する。それは、端的に言えば、命題とは理論家の抽象的な構造物に過ぎない、という考え方である。つまり命題とは、我々が通常の言語行為において用いているものではなく、そうした言語行為、特に述定に関する認知的態度や活動を分析しようとする際に要請される理論的虚

構でしかない、という考え方である。フレイゲ・ラッセルが用いた形式言語や、統語論の分析でしばしば用いられる句構造標識等は、そうした理論家の抽象物の一例である。これにより命題の構造型はそもそも内在的なものとされ、またその表象性は分析が追跡する認知行為などに由来することになり、確かに上記で必要とされた説明能力を、このアプローチは保持しているように思われる。しかし、著者によれば、このような形で命題を実質的なものと見なさない見解では、複合的な命題に対し適切な分析が施せないという。何故なら、命題があくまで理論家の虚構であり、通常の言語行為においてそれが用いられていないのであれば、複合命題において主体がそれについて何らかのことを述定していると通常見なされる命題は、存在していないことになるからだ。その場合、このアプローチでは、その主体が一体何について述定を行っているのかが全く説明出来ないのである。

このように考察を進めると、新たな命題観として必要とされる要素は、実際は三つあることになる。二つは、先にも述べたように、命題の構造型と表象性を説明出来ることである。そして新たに付け加えられたもう一つの要素は、命題を何らかの仕方で実質的なものと見なすことが出来る、という要素である。先のデフレ説的アプローチでは、前二者の要素は確保されていたが、最後の要素は確保されていなかった。結果、そのアプローチ

は複合命題に対して適切な説明を与えないことになり、不十分な見解と考えられるのである。

それを受けて、著者が更なる代案として提示したのが認知的实在論からのアプローチである。大雑把に言うところでは、「命題を認知的イベントタイプと同一視する」という見解である。例えば、文「雪は白い」が命題として $[\text{Prop}[\text{Arg snow}][\text{Pred Whitiness}]]$ を持つとすると、その命題はこうした単なる抽象的な構造に終始するのではなく、《雪について、その白さを述定する》というイベントタイプであると考えられる。この見解を採れば、命題が本質的に認知行為と結びつくこととなり、命題が実際のところ何であるかについて、虚構に留まらない妥当な主張が行えると著者は考える。

認知的实在論の立場に立ったアプローチは、命題観として必要とされる先の三つの要素を次のようにして確保出来る。まず構造型についてだが、これはデフレ説による命題観と同じく、形式言語や句構造標識などによる分析の余地を残しているため確保される。また、表象性は、そもそも命題が認知的行為と同一視されるため確保される。最後に命題を単なる虚構に留めず実質的なものと見なせるかであるが、これも認知的行為と命題が同一視されるが故に、自ずと確保されることになる。例えば、文「彼は雪が白いと信じている」などは、命題を述定の対象として持つ複合的な命題を表現することにな

るが、それは、《《雪について、その白さを述定する》という認知的行為について、それを信じていることを述定する》という複合的な認知的行為と同一視されることになる。この点からも、命題の実質性が確保されていることが分かる。

また、著者はこうしたアプローチのもう一つの大きな利点として、複合的な単称名や述語を含んだ文が表現する命題も適切に扱えることを挙げている。例えば「14の平方」と「196」は外延としては同じものであるが、前者は平方関数（～の平方）を数14に適用したものであり、それゆえ複合的な単称名となっている。外延的にのみ考えれば、こうした複合単称名を含んだ文により表現される命題は同じであることになってしまうが、それらの命題は構造的に異なっている以上、あらたな命題観はそれを反映出来るものでなければならぬ。著者によれば、認知的実在論によるアプローチを採れば、それが可能であるという。例えば、命題「6の立方 > 14の平方」と命題「216 > 196」を表現する文は、共に外延的な単称名のみを持ち、かつ述語において共通しているため、それが表現する命題がつながる事態そのものは同一である。しかしこれらはその構造において異なっているため、命題として異なるものと考えられる。著者によればその相違は、それぞれの命題が異なる認知的行為と同一視されることによって説明されるという。例えば、後者の命題は、端的に、《数216について、それ

が数196よりも大きいということを述定する》という認知的行為と同一視される。一方前者の命題は、《6を立方関数に、14を平方関数にそれぞれ適用する》という行為と、《6を立方関数に適用した結果導出される数について、それが14を平方関数に適用した結果導出される数よりも大きいことを述定する》という行為の複合的な行為と同一視されることになる。このようにしてそれぞれの命題の差異が説明されるのである。同様の分析は、複合的な述語を含む文により表現される命題に対しても適用出来る。

このように、認知的実在論によるアプローチは、様々な点で従来のものよりも多くの利点を持った命題観を提示することが出来るが、量化に関しては従来の命題観が包含していた問題をそのまま継承してしまっているという。例えば、 $\exists xFx$ は、次のようなそれと同値な命題と書き換えることが出来る。

$\exists xFx$

$\iff$ 性質「Fである」が何かについて真である

$\iff$ あるものは性質「Fである」がそれについて真であるようなものである

$\iff$ 「あるものは性質「Fである」がそれについて真であるようなものである」という性質はあるものについて真である

このような形で同値な命題への書き換えは際限なく続いていく。ここで同値とさ

れている命題は、最初の命題 $\exists xFx$ と構造において異なるものである以上、認知的行為としても異なるものであるはずである。つまり、命題としても異なるものでなければならない。しかし、認知的实在論によるアプローチでも、この場合における命題の差異を表現することは出来ないのである。解決策の一つとしては、量化もまた認知的行為として含むように、認知的行為のドメインを拡張することである（詳細は述べないが、本書で認知的行為として認められているのは、(i) 性質の述定、(ii) 関数の引数への適用、(iii) 性質の否定・連言・選言（複合性質の形成）、(iv) 命題の否定・連言・選言（複合命題の形成）、の四つである）。だが、こうした拡張によってどういった影響が出るかに関しては、著者自身もまだ分からないという。

以上が本書における議論の概要である。既存の命題観に見られた諸問題に対する著者の解決策としては、認知的实在論によるアプローチが一つの候補として提示されたが、それを自然言語における表現全体へと拡張する際に、現状では量子子を含んだ命題の分析に関し問題が生ずることが確認された。認知的行為のドメインを拡大するという著者の提案は確かに一つの可能性として考慮に値するが、それが具体的にどういった行為であるのかは不明である。自然言語における量化をどう扱うかは、例えば体系的な形式意味論を構築する際など、しばしば主題的な

問題として扱われる事柄である。確かに、著者による認知的实在論からのアプローチは魅力的なものであるが、量化という伝統的な問題を適切に扱えないことはかなり大きな不足点と言えよう。今後の改良が期待される。

また、著者によるアプローチの問題点としてもう一つ挙げられるのは、「述定」という行為が明確に定義されていないことである。例えばそれは、ある対象にある性質を帰属する、というものであろうが、果たして個体と命題を存在論的に同等な身分を持つ対象として扱って良いのか、また述定という行為は構造的でありうるのか、という疑問が残る。著者の提案に於いて、この「述定」なるものはかなり重要な役割を果たしていることは明白である。それ故、自身が提案する代案をより説得的なものとするためにも、正確で実質的な定義付けが必要であるだろう。

このように、著者により新たに提示された命題観は、必ずしも完全なものとは言えない。しかし、幅広い分野で様々な用いられている命題という概念に対し、ここまで真正面から挑んだ研究は非常に評価出来るものである。既存の命題観が孕む問題点を正確に指摘し、さらにそれらを克服しうる代案を、しばしば命題と関連づけて論じられる認知の観点から提示した本書は、言語哲学に携わる者のみならず、当該分野で研究する多くの者にとり、決して無視しえぬものであることは確かである。